

---

# ロゼッタ=ゲーム

白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロゼッタIIゲーム

### 【Nコード】

N1496S

### 【作者名】

白

### 【あらすじ】

100年に一度の大発掘に巻き込まれた高校生の古浦月也と他数名は異世界へと飛ばされた。その世界では「ROSETTAIIGAME（ロゼッタIIゲーム）」と呼ばれる全世界を巻き込んだ乱世が数百年間続いている。その目的は世界の何処かに眠るといわれる「7つの石碑に記された歴史を識る事」が大半であるが、中にはそれを巡って人が争う事で世界の覇者になろうと考える者もいる。そして今、古浦月也の「元世界へ戻る事と、1つだけ何でも願いを聞く事」を条件にした、歴史解明への大冒険が始まる。

## 終幕

それは二〇一一年十月二日の出来事だった。

今日はいつもと比べて体の調子が優れない。

いつもならば毎時間黒板に書かれた板書事項を普通に書き写すのだが、今日は体が重くてどうもそんな気分にはならなかった。

体育の時間も、技術実習の時間も同じく、体が何故か動かなかった。

熱がある感覚では無く、睡眠不足による体調不良でも無かった。

何せこの少年、古浦月也（こほつきげ）は超がつくほどの健康体で、每晚零時までには必ずベッドに入って就寝しているほどだ。

そんな生活だから風邪も滅多に引かなければ、体調不良で授業中に寝てしまうなんて事はこの十七年の人生でたったの一度も経験なかった。

時間が経つに従って、クラスメイトの心配する声に「大丈夫、大丈夫」と返事をするのも面倒になってきた。

そして六時間の授業も終わり、放課後を毎年恒例の文化祭の準備に勤しまなければならなかった。

古浦月也は装飾係を担っている。だが、文化祭における装飾の重要さも理解した上で、今日はやはり早退する事にした。

クラスメイトも彼の調子の悪さを真剣に心配しているようで、誰もそれを咎めたりはしない。

徐々に眠気も襲ってきて、これはちょっと大変な病気に罹ってしまってるんじゃないか、真剣に思う。

原因は全く分からないが、さっさと家に帰って早く寝ないと危ない事に巻き込まれるかもしれない。

フラフラと道を歩いて不良の兄さん達にぶつかって、リンチされて服を脱がされて……考えるだけで寒気がしてくる。

「早く帰ろ」

と、目を半分閉じながら、彼はゆっくりと学校を出た。

学校から家までは大体一？。体調のことを考えたら大体二十分くらいで辿りつく事が出来るだろう。

何もアクシデントが無ければの話だが……

いつもは無意識で歩いている通学路を、今日は何故か頭の中に思い浮かべて慎重に歩いている。

正門から広がる並木道を抜けるとそこには日夜賑わう短い商店街がある。そこを抜けると今度は高速道路の真下を通る事になる。田舎の様相も示しながら都会さも混じっているのがこの街の特徴だ。そこから暫く住宅街を突き進むと、自分の家がある。

帰ったら服を脱ぎ捨てて、着替えて……いや、いつそ制服のままベッドに飛び込んで誰も文句は言わないだろうと、彼は思う。

寝たら治る。死なない程度の深い眠りにつくのだ。そしたら気が付いた頃にはいつものように全快になって、笑顔で夜食を食べられるだろう。

しかし彼はこの時、思いもしなかった。

平和な明日は訪れず、混沌とした現実離れた世界がやって来ることを……

二度として、平和な世界に戻ってこれない事を、古浦月也は知らなかった。

彼の思う平和……それはいかにも高校生らしい安直な考えだった。明日からは放課後の文化祭の準備も真剣に取り組んで、一日分の後れを取り戻さないといけない。

何の面白味もない平凡な生活だが、日本人にはこんな生活が一番合っているのだと、しみじみ彼は思っていた。

だが、そうはいかないのが現実の厳しいところだ。  
何故か、思い通りに進まないのが人生なのだ。

現実を突きつけられることになるのは学校の帰り道。

並木道を抜けた先にある短い信号機。

霞んだ瞳で何とか信号の色を確認する。赤……恐らく赤だ。

青ならばこんなにビュンビュンと乗用車が走っているわけが無い。  
彼以外に信号待ちしている人は一人として居ない。

というか、どういうわけかここに来るまでの並木道の中で彼は誰  
一人として人間に会わなかった。

野良猫は見た気もするが、記憶の中では人間とは学校を出たから  
の数分間は出くわしていないと、ふと思った。

幾ら文化祭前だからといっても一人も別の学生と出会わないのは  
おかしい。

しかし今の彼にそんな事を真剣に考えれる余裕は一切無かった。  
倦怠感から来る眠気であったり疲労感が一番の原因だろう。

車が一台ブレーキ音を鳴らしながら止まった。

そこで彼は信号が青に変わったことに気付き、徐に歩き始めた。  
すると信号を半分ほど進んだ所で妙に体重く感じ、思わず足を止

めた。この信号は青から赤に変わるまでが約二分間もある為、彼は  
今すぐに轢かれてしまう不安は無かった。それよりも不安なのは自  
分の体だった。

まるで鉄球を足に括りつけているかのように重く、一気に体温が  
高まっていくのを感じていた。

視界も更に霞んで悪くなり頭もクラクラする。彼は人生で一度も  
貧血になった事は無かったが故にこの現象を「死と捉えかけていた  
が、今彼を襲う感覚としては貧血と表現する事が一番正しいだろう。  
息も持久走の後のように激しく切れてしまっって呼吸が整わない。

学生靴を持った左とは逆の右手で頭を抑え何とか歩こうとするがやはり足が進まない。

症状は徐々に悪化していき、遂には吐き気を催すまでに至った。

そこでふと彼は信号待ちをしている一台のトラックに目を向けた。視界が悪いせいなのか、真相はわからないが……居る筈の運転手が見当たらなかった。

一体今自分とその周辺に何が起こっているのか。

十七年の人生の終わりが直ぐそこまで来ているのだろうか。

絶望。驚嘆。

彼は走馬灯のようにこれまでの平和な人生を思い返そうとし始めた事により、やはり死が近いのかと直感した。

そして意識は薄れていき、左手の学生靴を地面に落としながら自分の膝も地面に崩れ落ちた。

両手両膝を地面につき四つん這いの恥ずかしい格好になっていた事さえもどうでも良かった。

死ぬ直前というのはこんなにも苦しいものだったのか。

視界は遂に真っ暗になり、コンクリートの地面は真っ暗な闇に包まれた。

完全に視力を失っ

違う。

視界が暗くなったのではない。本当に地面が黒く変色している。

証拠に、彼がふと顔を上げると信号の先にはちゃんと常連の駄菓子屋がある。今日は定休日のようなのだが、それはそこに存在しているじゃあこの黒い地面は一体……

考える暇も無く、彼の体はズブズブと黒い地面に吸い込まれていく。

「何だよ……これ」

彼が言葉を言えたのはそこまでだった。

そして続けて、経験した事の無い感覚が体を襲う。水に叩きつけられるような衝撃……痛さは無い。

何が起こったのかを理解出来ないままに自分の体がこの世と分離されていくのが分かる。

恐らく自分は穴の中に落ちたのだろう。

背を下にして落ちていく自分の視界には黒い世界の中に光の射し込む一つの円型の穴があり、そこからさっきのトラックが一瞬だけ見えた。

そして再び戻りかけていた意識がを失いかける。

意思とは関係なくして目が勝手に閉じていき、自分の体が底の無い穴に落ちていく感覚がずっと続いていった。

刹那

別の誰かが彼と同じ様に穴から落ちる光景を、閉じゆく瞼の隙間から彼は確りと捉えていた。

二〇一一年十月二日、午後四時二分……

彼の物語は静かに幕を降ろし、

二三五〇年十月二日、午前十時五分……

彼の物語の緞帳は静かに始まりを告げた。

## 第1話：目覚めは百年の行状

あれから、一体どれほどの時間が流れただろうか。

何年……何十年……いや何百年。

とにかく苦しい程に永く夥しい程の年月が過ぎた。

闇が充満した穴に落ち、射し込む光が消えていくのをその視界で確りと見てからそれだけの時が過ぎた。

それは感覚的なものなのか、それとも本当にそれだけの時間が流れたのか……わからない。

自分の姿を見る事も出来ず、筋一本動かす事さえもままならない。“絶望”という化け物がじわりじわりと古浦月也の体を舐めるように侵食していく。それに彼は抵抗する術も無いままに長い年月が過ぎた。

自分はその時信号の真ん中で突然崩れ落ち、幻覚か何か分からないこの穴に落ちた。

人間が死んだ時の感覚は、生きている人間には決してわからないものだ。

生命が朽ちる瞬間に過去の出来事を想い出したりすると聞くが、そんなものは迷信に過ぎない。

故に彼は穴に落ちるこの感覚こそが“死”なのだと思った。

腑に落ちない点は数あるものの、心の何処かでそれに納得し受け入れる自分が居た。筈だった。

これまでの平凡ライフに快くピリオドを打てた筈だったのに……

生きている。

穴に落ちて長い年月が経った頃、徐々に体の感覚が取り戻されていくのを肌で感じ取っていた。

始めに右手の中指が動くようになり、次に目、口、脚、腕……と

順番に動きを取り戻していった。

光が心に宿った瞬間だった。

何百年振りか人間として、生きている感覚が甦った。

これが“生”か。

彼は思った。

生まれて初めて感じる生の実感、言葉では説明できない未知の領域である。

だが少なくとも彼はそれを理解し、感じ取っていた。

そしてそれからまた幾年の時が流れ、遂に古浦月也は目を覚ました。

そこは……見知らぬベッドの上だった。

目を覚ました月也はまだ重い体を精一杯動かし、目に掛かり視界の妨げになった黒髪を手で払いのけた。

そして今、自分が置かれている状況と身に起きた何かを考え始めた。

「……………」

目を右に動かすと木製の家具が見えた。クローゼットや筆筒<sup>たんす</sup>。

部屋の広さは七畳程度で、生活感が溢れ出る一般庶民のやや小振りな部屋。そして鏡に映ったベッドに横になる自分の姿も確認できた。知らない場所で横になる自分の姿は不思議な感じだった。

まだ頭がボーンとして回転していないが、さっきから頭の奥底で自分を呼ぶ声があるような気がする。

耳鳴りに近い感覚で響いている。

意識すれば全く気にならない程度の声。それがなんなのかは全く分からなければ検討もつかない。意識する必要もないだろうが一度考えるとその声がずっと心の奥深くからどんとどんと迫ってくる。しかもそれは徐々に鮮明にはっきりとした声に変わっていき、意識せずとも囁きは月也の耳に届いた。

甘くて優しいが、どこか男らしい声。

悲鳴とは違う喜びの声。男の子の声。  
初めて聞く声。

それが何度も何度も月也を呼ぶ。  
ポンポンと肩を優しく叩きながら、心配するように、小さく言った。

「ねえ、大丈夫？　おい」

それに月也は完全に意識を取り戻し、さっきまではやや曇っていた視界が晴れて鮮明になった。

そしてその目を大きく見開き、声の主の方を向いた。

「……君は？」

「良かった、やっと目が覚めたんだね」

名を訊いたつもりだったが、彼の横に立った小柄な美少年は無邪気な瞳で月也を見つめながらそう言った。

身長は見た目、百六十？あるかないかくらいの男子にしては小柄な体型。その低い身長に見合った薄い金色は深く被った黒帽子でほとんどが隠れてしまっている。たれ目で、優しそうな雰囲気を出している端正な顔立ちだ。

年齢的には中学生か……下手したら小学生にも見える少年の純粋な茶色の瞳を見つめながら月也は上半身だけをベッドから起こした。少年は月也の体を支えてそれをサポートする。

「随分と長い間寝ちゃってたね。今日で確か……三日目だよ」

「三日も……？　……それはそうと、君は？」

状況が把握できない月也はとにかくもう一回同じ質問を口にした。すると少年は手に持っていた文庫本に頬を挟んで閉じ、自己紹介を始めた。

「僕は沓丘桐緒くつおかきりお。気軽に桐緒って呼んでよ」

そう言って、桐緒はベッドの傍にあった背凭れの無い椅子に腰を掛けた。

そして再び文庫本の栞の挟まれたページを開き、黙々と読み始める。

名前を知っただけで謎の根本的な解決ならないままに、会話は一瞬で終了してしまった。

まず知りたいのはここはどこなのか。

それを知るだけでも少し気分が良くなるはずだと月也は思い、読書に熱中する桐緒に戸惑いつつもそう訊ねた。

すると桐緒は再び本に栞を挟み、閉じる。

月也は心のどこかで勝手に『ココは日本』だと決め付けてしまっていた。自分は意識を失うまで妙な体験はしたが確実に日本に居たし、自分を介抱してくれていたであろう少年も思い切り日本名だ。それだけでも常識的に考えてここは日本だと、断言しても可笑しくは無い。

しかし現実には思わぬ方向に流れている事に彼は気付いていなかった。

「わからない」

そう一言、桐緒は言った。

そして続けて自身のこれまで経緯を思い出しながら、一つ一つ説明し始めた。

「三日前、僕も君と同じ状況だったんだ。目が覚めたら芝生の上に倒れてて、直ぐ傍に君が居た。何回も起こしたんだけど全く起きなくて、死んじやったのかと思ったよ。……で、近くにあったこの小屋に君を運んだんだ」

「……それだけでここが日本じゃないなんて言われても信じられないな」

「誰も日本じゃないなんて言ってないよ。でも、その可能性はほとんど無いよ。残念だけど」

「何か知らない場所でも見たのか？」

「うん。君をここに運んでから周辺を搜索してみたんだ。そしたら見た事も聞いた事も無い街が傍にあった」

「その街の名前は？」

「マルコシアード」

確かに月也の知識の範囲内ではそんな街の名前は聞いた事が無かった。

それどころか全世界に“マルコシアード”という地名は存在しないのだ。地図帳を隅々まで確認し、血眼になって捜しても見つかる事は万一ありえないのだ。

あるとすれば、未知の大陸が発見されてそう名付けられたという非現実的な事件が起こった場合くらいだろう。

少なくとも今、自分と桐緒の周囲では考えも出来ない事態が発生している。非現実的な事も実際に起こっているかもしれないし、穴に落ちた現象も現実だったのかもしれない。そう考えると全身鳥肌が立ち、今後が不安になってくる。

「はあ……」

そう溜め息をついて気を紛らわそうとする。

が、そう簡単にはいかず不安ばかりが胸に立ち込める。

歯を食いしばり拳を握る月也のその姿から、彼が苛々している事は誰の目にも明らかだった。普通ならばここでそっとしておくべきだが、桐緒の対応は普通とは少し違った。

「お腹、空いてるでしょ？」

彼なりの気遣い。

それが結果的に月也にとっては大きな心の救いになった。

桐緒は席を立ち、ベッドから少し離れた位置の扉の傍に在る小さな台所に向かい、これまた小さな皿の上に置かれたパン二斤を皿ごと手に取り、月也に無言で手渡す。

恐らく感覚的に月也は何十、何百年の間を彷徨っていた。故にパンを目の前にし、食事という事柄を思い出すと腹が一気に減ってきた。

久々の食事な気がする。言葉では言い表せない程の長い時の感覚がその感情を更に増幅させる。

柔らかめのロールパンを千切り、次々と口の中へと運び味覚をフルに使って味を噛み締める。本来は米派というのは秘密だが、今はそんな事を言ってる場合じゃなければ、善意を示してくれた桐緒を傷つけるわけにはいかなかった。

そして無意識に口が勝手に動き、率直な感想を述べる。

「おいしいな、このパン」

そのロールパンは明らかに市販の物では無い、職人の手によって作られた温もりと旨味が感じられる。

桐緒がそのマルコシアードという街で購入したのだろうか。じゃあお金は……？

等と幾つかの疑問は浮かんでくるが、このパンの旨味の前にはどんな疑問も吹き飛んでしまう。

それから数分間、月也は黙々とパンを食べ続けると二斤あったパンをあつという間に全て食べ終え「ご馳走様でした」と小さく呟いた。

そして食べ零したパン粉の乗った空き皿をベッド際の木製の台の上に置く。

腹が満たされて気分もやや落ち着いて来た気がした月也はここである事に気付いた。

「そう言えばさ、名前言ってなかったよな？」

「うん」

「古浦……古浦月也だ。オレの事も気軽に“月也”でいいよ」

「わかったよ、月也」

そう言って二人は無言の握手を交わす。自己紹介をし合うだけでも自分と距離が狭まった気がするのはいのせいだろうかと、月也は何となく思う。

「桐緒はこれからどうするつもりなんだ？」

「もう一回マルコシアードに行つて情報収集……かな。二日前に行

った時は何か事件があつたみたいで騒がしかったんだ。それを含めて色々調べないと」

「オレも一緒に行つていいか？ 一人じゃ不安だし……嫌な予感がするんだ」

「別に構わないけど……嫌な予感って？」

「……………」

月也のこの無言は分からないという一種の意思表示だった。心の中でざわめく違和感を素直に口にただけだったが、それは桐緒も同じだったようで、納得した表情を見せた。

そしてその後、二人は感覚的には随分前に起きた出来事を互いに話し合った。

体調不良に始まった強烈な眠気、そして突如現れた大穴に落ち、何百年の感覚に汚染され、見知らぬ大地で目を覚ました。

そして意外な事に月也と桐緒、二人ともが全く同じ日の同じ時間帯に同じ体験をしていたという事だった。

これは驚かざるを得ない……啞然として言葉が出なかった。

桐緒の話によると、彼は現在高校一年生。その風貌で月也より一つだけしか学年が違わない事に違和感を感じるが……それは気にしないでおこう。

二〇一一年十月二日、沓丘桐緒の通う高校は創立記念日で休校日。桐緒はせっかくの平日休みを有効に利用する為、当日限定発売の新作文庫を買いに外出、その帰り道の午後四時過ぎに突然気分が悪くなり……後は月也と全く同じの現象に陥つたらしい。

「ま、とにかくそのマルコシアードって街に行つてみよう」

「体はもういいの？」

「ああ。何日も寝てたんだろ？ ならもう万全さ！」

そう言つてグツと親指を立て、万全である事を行動でも示した。ベッドが起き上がり始めて気が付く自分の姿。

学校指定のブレザーとズボン。あの時から全く姿は変わっていないかった。

そうして二人は小屋を出、それぞれ思い思いに体を動かしながら出発の準備を整えた。

広がる世界はまるで外国のようだった。

青空が包む広大な芝生の上に木製の小屋が立ち、その傍には終着点の見えない長い川が煌びやかな輝きを放ち流れている。

桐緒が言うにはこの川沿いに歩いていくと僅か五分ほどでマルコシアードに到着するらしい。

そう言われてみれば、その方角が賑わっているようなそんな感じがする。それにうつすらと街のシルエットが見えるような気がする。そんな光景を月也は童心に帰って眺めていた。

日本でこんな風景の在る場所はテーマパーク等でしか無い為、実際にその目で見るのは初めての経験だった。その分その衝撃もやや大きかった。

川沿いに無言で歩いて五分後。

ガヤガヤと賑わいを見せる一つの街にたどり着いた。

その街こそが マルコシアード である。

商業が盛んな街で、街を東に進んだ所には小さな港町 イーストポート が在る。そこを経由して世界中から様々な物資（主に衣類、雑貨が盛ん）を輸入して、世界中のセレブが買い物に訪れる有名な街だ。

なんて風な事が町の入出口の看板に街名と共に細かく書かれている。どうやら桐緒は前に来た時にもこの看板を見ていたが、その右下に書かれた重大な事項には気付いていなかった。

ロイマール王国王・アナコンダ

そう、右下の僅かなスペースには極々小さく書かれていた。

「ロイマール王国……？ そんな国、聞いた事も見た事もないよな」  
「うん。……やっぱりここは日本じゃ無い事は確かだね」  
「それだけじゃない。オレ達の住んでた地球かどうかも微妙になっ  
てきた」

歯をかみ締め最悪の状況が現実になりつつある月也のやり切れない表情に、桐緒も同調して眉間に皺を寄せた。

中々乗り気になれないが、情報収集を始めなければ元も子もない。二人は看板を後にし、街に入ろうとした。その時。  
「いやはや素晴らしい。思わず二度見してしまう程の潜在能力をお  
持ちだ」

紳士のような口調で、一人の男が背後から彼等に迫った。

黒いハット、蝶ネクタイに黒いスーツと白いカッターシャツ、手にはステッキが握られており見た目は完全にマジシャンのような風貌だ。そして口元にはそれを象徴するかなのような黒い髭。

細められた茶の両目に見つめられた二人は思わず足を止め、体はそのままで顔だけ振り返った。

「特に左のお方、素晴らしい。あの方ならば気に入らそうだ」

男から見て左に位置する月也を見てそう微笑みながらも不気味な笑みを浮かべた。

男は二人よりも随分身長が高く、軽く百八十八cm後半かそれ以上はありそうだ。

その眼差しは舐めまわす様に彼等二人を見つめ、まるで生態観察を行っているかのようだ。

「おや、失敬。自己紹介が遅れましたな。私はエドゥアルベリコ。周りの者はベリコなんて呼んだりしておりますが、自由に呼んでくださって結構ですよ」

「……………」

「古浦月也様、並びに沓丘桐緒様。ようこそ インダー・ロイルへ。そしておめでとございます。貴方方は見事に当選されました」

男がそう口にした。

次の瞬間。

息を吸って吐く暇も無い一瞬の内に、月也と桐緒の目に映る風景が変わってみせた。

自分達が無かをした訳じゃないし、そんな事が出来る訳がない。

二人は状況が掴めずに辺りをキョロキョロと見渡した。

黒いタイルに赤のランプ模様の描かれた西洋的な床。壁には動物と思われる生物の剥製を始め、ダーツ・絵画・日本風の水墨画など……様々な趣向のそれが飾られている。

そして二人が居るのは巨大な扉の前で、男との距離も変わっていない。

これは信じがたいが……瞬間移動をしたとでも言うのだろうか。

「さて、一体どこから説明すればいいのやら……」

「あんた何者だ……ココは一体どこなんだ!？」

「だから言ったでしょう。私はエドゥアルベリコ……そして此処はインダーロイル。貴方方の住んでおられた地球アースとは少しずれた時空列に存在する……所謂いわゆるパラレルワールドの一種です」

「パラレル……ワールド?」

子供でも分かる。つまり此処は異世界だと、この紳士は口にしたのだ。

見た目にそぐわない冗談を言うんだなと発しようとしたが、月也はこれまで自分の身に起こって来たありとあらゆる不思議を思い出し、信じずには居られなかった。

桐緒も同じ。言葉さえ発しないが、ベリコの言葉を全力で否定できる理由が無かった。

「そうです。所謂此処は貴方方からすれば異世界! 魅惑の世界でしよう? まあ直にそう言ってられなくなるんですが……とにかく、ここが常識ではありえない事が起こっていると……御思いになつて下されば今は結構で御座います」

「一つ訊きたい」

「何でしょう?」

「オレ達二人を異世界に連れて来たのはお前なのか？」

「いいえ、別のお方です。私はその人物の舎弟であり召使いであり執事。今回私は召使いとして貴方方を此処に連れてきて参りました。そして……異世界に来たのは何も貴方方二人だけではありませんよ。まるで他にも自分達と同じ境遇の人間が居るといふ事実をさらっと口にしたベリコ。」

話は思わぬ方向に次々に進んで行くが、やはりまだ信じられなかった。

頭で違つと考えても別の何かを否定する。さっきからその繰り返しに月也の苛々は募るばかりだ。

するとようやく桐緒が口を開き、意外にも話の確信を突くような疑問を投げかけた。

「僕達は何の為に呼ばれたの？ 理由が無いって事はないと思うけど……」

「ふむ……確かにそれが一番大事ですな。いいでしょう。教えてあげますよ。」

ですがその前に……旨い紅茶でも御淹れしましょうか」

## 第1話：目覚めは百年の行状（後書き）

作者コメント

初めまして、白と言います。

この度はロゼッタIIゲーム第1章・第1話をお読みいただきありがとうございます。  
とございます。

本当はプロローグで挨拶したかったんですが、

異世界来訪は余り好きな分野ではないのですが、

誰でも読める物語はこれが最適なのかなと思います（笑）

今年受験と言う事もあって中々更新できないかもしれませんが、  
もし読んでくださる方が居るならば、頑張って更新したいと思いま  
す。

では意見・評価・感想、お待ちしております！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1496s/>

---

ロゼッタ=ゲーム

2011年4月9日23時55分発行